

街まるごと

“Whole Town Residency”

レジデンス

KAB Library and Residency Report 2022-2023

International Cultural Exchange Project
“Whole Town Residency”
2022 10.1-10.31
2023 5.20-6.30.

Björn Bengtsson
ビョルン・ベングツソン

Léna Hiriartborde
レナ・ヒリアルトボルツ

Nao Nishihara
西原尚

Miwako Hashimoto
橋本美和子

〈すみだ向島EXPO2022〉提携事業

2022年10月1日～10月31日
2023年5月20日～6月30日

KAB Library and Residency

墨田区京島に設立したKABライブラリー&レジデンス(2020年～)は、アーティスト・イン・レジデンスやワークショップ、展覧会など、さまざまな文化事業を実施してきました。2020年から毎年10月に開催している《すみだ向島エキスポ》に恒常的に関わっています。今年、国際文化交流事業『街まることレジデンシー』として同時開催し、国際プログラムをより効果的に実施します。

今年のプログラムは、アーティスト・イン・レジデンス・プログラムを基本とし、フランス・スウェーデンのアーティストと国内のアーティストを招聘し、地域に滞在して制作を行います。また、展覧会、ワークショップ、パフォーマンス、アーティストトークなど、オフラインでのプログラムを通じて、実際に人と人が触れ合う機会を創出しました。

KAB Library and Residency (2020-), located in Kyojima, Sumida, has implemented various cultural projects such as the Artists in Residency, workshops, and exhibitions. It has been involved as a participating organisation in the 《Sumida Mukojima Expo》, which has been developing in the area every year since 2020. This year, the KAB project was held simultaneously as an international exchange project, making the international programme more effective.

This year's programme is based on an artist-in-residence programme, inviting a French/Swedish artist and a domestic artist to stay and work in the region. The programme will also create opportunities for actual contact between people through exhibitions, workshops, performances, artist talks and other offline-based programmes.

Project Contents

国際的なアーティストが、墨田区京島周辺を舞台に、リノベーションされた町工場や古民家を会場に作品を昇華させた。住民であり、ものづくりの担い手でもある地元アーティストとの情報交換や交流を通じて、新しい表現を探るリサーチ型プログラム。国際交流、ものづくり、住民参加型の交流プログラムを複数回実施することで、地域住民全員が自然にアートのあるライフスタイルになるような状況を目指します。

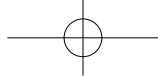
2022年のすみだエキスポで発表したアーティストは、レナ・ヒリアルトボルズ(マルセイユ)、ビョルン・ベングトソン(ストックホルム)、西原尚(横浜)の3名です。

2023年5月、きらきら商店街の旧バーバーでアーティスト橋本美和子による体験型アートプロジェクトが開催され、フランスと東京の文化交流プログラムの参加者として、マルセイユのD.D.A Contemporary Artsに2週間滞在しました。

International artists from Japan and abroad have explored the northern area of Sumida Ward, using renovated town factories and old houses as venues to sublimate their works. A research-based programme to explore new forms of expression through information exchange and interaction with local artists who were also residents and leaders of the manufacturing industry. The aim was to create a situation where all the residents naturally adopted a lifestyle with art by holding several exchange programmes involving international exchange, craftsmanship and resident participation.

The three artists presenting at the Sumida Expo 2022 were Léna Hiriartborde (Marseille), Björn Bengtsson (Stockholm) and Nao Nishihara (Yokohama).

In May 2023, a performative art project by Miwako Hashimoto, an artist, was held at the old Barbar, Kirakira Shopping Street, and she stayed D.D.A Contemporary Arts, Marseille, for two weeks as a participant in a cultural exchange programme between France and Tokyo.



Kab



Illustration by Riki Akahoshi

Index

すみだの確信を辿るラビリンス——レナ・ヒリアルトボルツ	2
古民家を彩る映像空間: 日常から非日常へ——ビョレン・ベングツソン	4
まちのにぎわいを調律する——西原 尚	6
《ケア》にまつわる経済圏「魔女のオークション& 闇市」——橋本美和子	8
絡み合うライフとアート: すみだ向島EXPO 2022を振り返る——トマ・ヴォティエ	10
不可視の世界を遊行する、その可能性: KABの「街まるごとレジデンシー」——F.アツミ (Art-Phil)	12
「街まるごとレジデンシー」: KAB 国際文化交流事業の本格的始動——嘉藤笑子	13
KAB TALKs アーティストとの会話から広がるまちの特性	14
KAB 読書会 地域、オンライン、美術館へと拡張する本を媒介とした交流	15
Labyrinth Tracing Sumida's Convictions ——Léna Hiriartborde	16
Visual Space in an Old House from the Everyday to the Extraordinary ——Björn Bengtsson	17
Tuning the Conviviality of the City ——Nao Nishihara	18
"Witches' Auction & Black Market" for the Economic Sphere of "CARE" ——Miwako Hashimoto	19
Life and Art Entangled, Recounts of Sumida Mukojima EXPO 2022 ——Thomas Vauthier	20
Traversing through the Invisible World Retrospectively, and its Possibility - KAB's "Whole Town Residency"——F. Atsumi (Art-Phil)	21
"Whole Town Residency" - KAB International Cultural Exchange Programme in Full Swing ——Emiko Kato	22
KAB TALKs -The Characteristic of the City Spreads through Conversations with Artists	23
KAB Reading Club -Book Mediated Exchange Extending to the Community, Online, and Museum	23
街まるごとレジデンシー 会場マップ	24

助成: 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京



すみだの確信を辿る ラビリンス

レナ・ヒリアルトボルツ

Léna Hiriartborde

(マルセイユ)

レナ・ヒリアルトボルツは、マルセイユのD.D.A. Contemporary Art (以下、DDA) からの派遣というかたちで来日した。到着して間もなく、彼女のワークショップとプレゼンテーションを行った。観客は、2022年9月23日(金)・24日(土)の2日間にわたり与えられた白地図を片手に京島のまちを巡りながら、気にかかった情報をスマホカメラで撮影するか、テキストにしてシェアするというものだった。会場は、明治通り沿いの「旧邸稽古場」であることから、観客が大きな幹線道路を渡る場合と路地裏に入り込む場合とに別れて行動したことで、まちの構造を知ることができ興味深い結果になった。当然ながら、参加者はすみだに興味がある人が多かったためか、熱心に言葉に残したものが見られ、単純なモノや情景の撮影でなかったことから、京島に魅力があることが証明された。また、観客がバイリンガルで多国籍だったことも付け加えておきたい。

レナが滞在していたスタジオは、KAB Library and Residency (以下、KAB) という私設の図書館でもある。《すみだ向島EXPO》の参加作家として、週末限定でオープンスタジオを行った。訪れた人は、KAB蔵書のなかから印象に残った書籍の文章を抜き出して、レナがその部分をAIの翻訳機能を用いて仏訳する。その文章を再度、AIで和訳を行う。すると、原文とは異なる文章が現れる。そうしたデジタルエラーともいえる文章と書籍のなかの原文をつないでいながら、新しい文章を生み出していく。最終的には異なる世界の書籍をつくりだした。

滞在最終日のパフォーマンス「In the 15th Night, the 25th hour (十五夜、25時) ではちょっと“不思議ちゃん”だったレナはすみだらビリンスに相応しい人物ともいえるが、パフォーマンスは月に捧げるポエトリーディングで観客をまちなかへ音声ガイドで誘導していく路地裏ツアーのようなものとなった。彼女は京島のキラキラ橘商店街にあ



るCHAYAというビルの屋上で、そこからWifiで音声を飛ばした。観客は配布されたイヤホンを耳に当てて、その音声を聞きながら京島の路地を歩いていく。そこから流れる音声とは、道案内には直接関係のないフランス語の詩と、AIによって翻訳されたデジタル音声の日本語が交互に解説されるものだった。しかし、観客が導かれていく道筋は、事前に作家が路上に貼り付けたウサギや月のイラストであって音声ガイドではなかった。つまり、作家によるポエムを聞きながら、イラストを探しつつ最終地点ビルの屋上へ向かうというものだ。そうして辿り着いた先は、京島のまち並みが雲海のように見渡せる場所で、スカイツリーが夜空に光り輝く美しい情景だった。

フランスからの滞在アーティストは、ほとんどの時間を制作に費やして集中していたといえるだろう。多忙なスケジュールから解き放たれたレナにすみだという場所は、地図の裏書きのようなものだったかもしれない。

(嘉藤笑子)

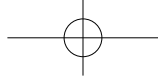
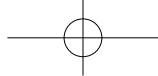


Photo by Thomas Vauthier

レナ・ヒリアルトボルツ (Léna Hiriartborde)

1992年生、マルセイユ拠点。リサーチやワークショップなどを通じてプロジェクト・ベースに制作するアーティスト。テキスト、パフォーマンス、複数のマテリアルを使ってリサーチの成果を展示してきた。フランスの美術大学を卒業後にチリ、コロンビア、インドなどでリサーチをしながら展覧会やワークショップなどのプロジェクトを行っている。その土地に住む人々の生活や土着的な文化・環境への洞察を深めて視覚化する。今回のプロジェクトでは、下町コミュニティや木造密集地の長屋を改装した物件に滞在しながら、地域でリサーチをした後、ワークショップやパフォーマンスを行った。



昭和の古民家で彩られる映像空間： 日常から非日常へ

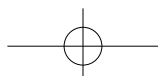
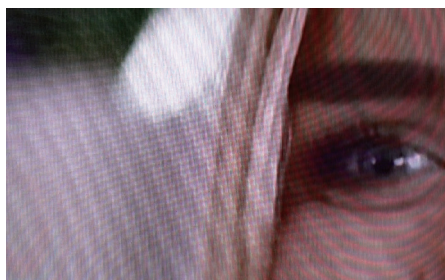
ビョルン・ベングツソン

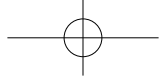
Björn Bengtsson

(ストックホルム)



Photo by Björn Bengtsson





ビョルン・ベングツソンが、KAB Library and Residency（以下、KAB）に接触してきたのは、2021年、世の中がコロナ禍で文化事業や公共施設が封鎖中のときであった。KABは2020年1月に開館した直後に活動を休止することになったが、継続するためにオンラインによる読書会やワークショップを開催していた。当時、海外レジデンスは、すっかり沈静化している時期だったが、ベングツソンは、自身の写真集3部作の完成を目指して、日本での滞在制作を望んでいた。

結局、アーティストが正式に滞在するのは、コロナが少し落ち着いた2022年である。ビョルンは、過去に筑波大学に短期留学をした経験もあり、日本文化に対する気持ちが強く、滞在には東京に滞在できることを楽しみにしていた。彼のパーソナリティが温和なことから、近隣の人たちやアーティストと打ち解けて友人関係を築いたことは、制作にプラスになったといえるだろう。

長年、写真を中心に制作してきたベングツソンは、映像作品に対する意識が高く、展示作品は完成度を高めるためにスウェーデンで編集をしてきた50分程度のDVD作品とIndigoシリーズの写真集2冊であった。10年以上のライフ（人生＝生活）にかかわる画像をコマ撮りでつなぎ合わせた動画は、ダイアリーのようなものだが、イコライゼーシ

ンによって反転画像になったり、一時的に異空間にもなったりするが、その基本的な姿勢は日常という普遍的な情景への眼差しである。

今回、作家には古民家を一軒まるごと展示会場に提供したが、部屋を暗転させて日本家屋の風景をつぶした。こちらとしては、下町という昭和の景観を生かしたインスタレーションが望ましいと考えたが、展示環境から過剰な要素を剥ぎ落すことで作品に集中させようという意思が見えた。確かに長時間の映像にもかかわらず、畳に座しながらのんびりと鑑賞できることが可能となった。暗い部屋でも居心地のよい空間ができたといえるだろう。

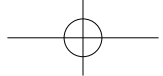
また、作家は日常的にカメラを持ち歩いたが、特に撮影を中心に活動していたというより、まちの探索、人の観察、出会いをめぐる日々だった。その証拠に彼の最終日の交流会が、一番盛り上がりだっていたといっよよい。彼の友人作家がスウェーデンから集団で来場し、さらに京島に滞在中のウェンデルン・ファン・オルデンボルフやフランス人研究者のトマ・ヴォルティスなど海外ゲスト、何より《すみだ向島EXPO2022》参加アーティストたちを含めて20～30人ぐらい集まってくれたのはうれしい。ビョルンの滞在成果は、ネットワークづくりだったと合点がいったのもこのときのことだった。

（嘉藤笑子）



ビョルン・ベングツソン (Björn Bengtsson)

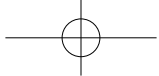
1982年生、ストックホルム拠点。映像・写真・コンセプチュアルを中心に制作するアーティスト。特に写真に対する情熱は途絶えることがなく、映像制作ビデオやアニメーション、インスタレーション、コンセプチュアル、書籍出版など、多彩なメディアを渡りながら、映像表現を中心に制作してきた。2001～2003年にイギリスのカンブリア芸術大学写真学部を卒業した後、写真を習得するためにストックホルム王立芸術大学（2013年）および大学院を修了（2015年）した。大学院への進学前には、筑波大学の研究生（2011年、3か月間）として来日した経験をもつ。今回は、昭和時代の古民家で映像作品の上映と2021年に出版した写真集を展示した。



まちのにぎわいを調律する

西原 尚
Nao Nishihara





西原 尚はこれまで、「音の美術」として音を主軸にした内容で複合的な芸術領域における作品を発表してきた。本プログラムでは、西原は京島エリアで最古ともいわれる木工所や鉄工所であった長屋の一角をリノベーションした建物内でインスタレーション作品を展示するとともに、キラキラ橘商店街でパフォーマンスを行った。

旧鉄工所であった長屋内に展示された「まじめな機械（京島）」では、レール、ドラム缶、プラスチックの樽、缶などからなるキネティック（動力を用いた立体作品）が1階部分に設置され、観客はスイッチを押すことでキネティックを作動させることになる。建物の2階部にはピンデカンというインドネシアのかかしに着想を得た作品が配置され、竿先に付けられた風車が金属音を鳴らす。それぞれのキネティックはまるで動物のように、ゆっくりと前進し、あるいは軽やかに旋回しながら、廃材のサウンドスケープを織りなしていた。

京島共同木工所という長屋内に展示された「息」では、巨大な拡声器が屋内の各所に方々を向いて減衰するホワイトノイズを発生するインスタレーション作品だ。ホワ

イトノイズを呼吸のように発する自家製の音のシンセサイザーによって、巨大な拡声器から再生される仕組みとなっている。まだ長屋が木工所として利用されていた当時の会話や人々の面影、あるいは気配は、拡声器から再生されるホワイトノイズとともに霧のように現れたかと思うと、ゆっくりと減衰し、いつしか消えていった。

さて、キラキラ橘商店街を軽やかに練り歩く西原ら3人によるパフォーマンスは、商店街のスピーカーから流れる歌謡曲と交ざり合って、あるいは掻き消すかのように、まちのにぎわいに新たな息吹を吹き込むものとなった。舗道に擦りつけられるシンバルや片手で演奏される横笛とドラムによるインプロビゼーションは、一人の人間の身体をとおしてさまざまな祝祭的な響きをかき鳴らしながら、まちの人々の気持ちを明るくさせていった。

西原の作品とパフォーマンスはものや身体をとおして発散される音響とともに、まちのにぎわいというサウンドスケープを織りなす一つひとつの音／声を調律し、噪音のなかからその場所に固有の音楽を紡ぎだしていった。

(F.アツミ)



西原 尚 (Nao Nishihara)

西原 尚は、音と美術を主軸にした内容で複合的な芸術領域にまたがる作品を発表している。キネティック（動力を用いた立体作品）、インスタレーション、パフォーマンスなどの多ジャンルを横断しながら創作活動を行っている。特にサウンド（音）に対する創作意欲発露は大きく、身体や物体を音につなげることで「音の美術」へ作品を発展させてきた。メディアアートやサウンドアートとしても解釈できる作品もあり、その表現はオリジナリティに溢れている。今回は、京島エリアで最古ともいえる長屋の一角を建築家が自発的にリノベーションした2拠点でのインスタレーション、商店街でのパフォーマンスを行った。

《ケア》にまつわる経済圏 「魔女のオークション&闇市」

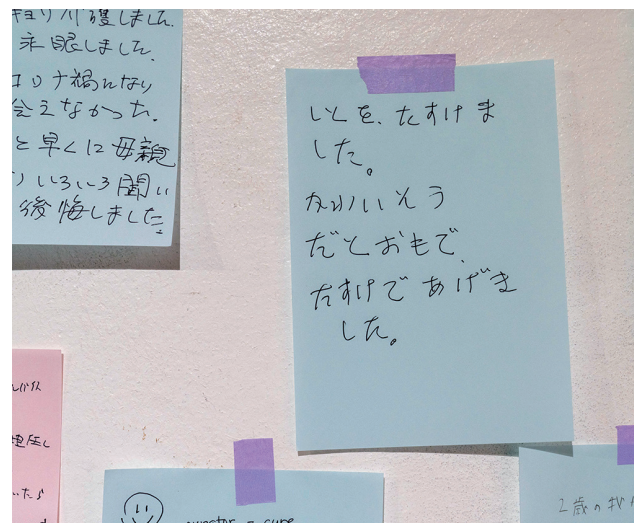
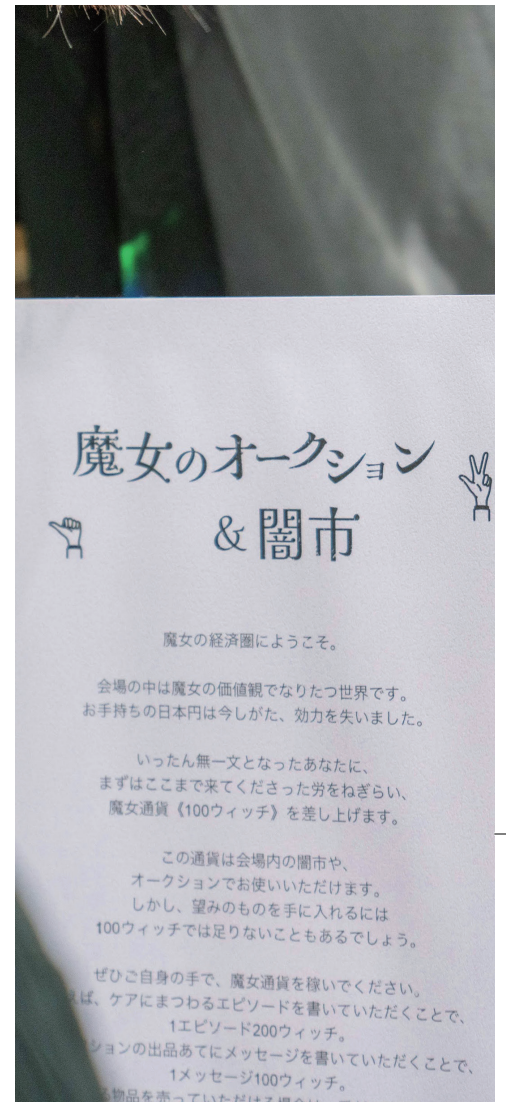
橋本美和子
Miwako Hashimoto

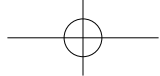
2023年5月20日（土）21日（日）の2日間は、キラキラ橘商店街の元店舗「バーバーアラキ」にて、橋本美和子によるアートプロジェクト「魔女のオークション&闇市」と彼女が率いる「So Tired Collective」という参加型プロジェクトを開催した。コンセプチュアルアーティストであり、近年はソーシャリー・エンゲイジド・アートに取り組んでいるアーティストである。今回は、《無償労働》や《ケア》の問題に光を当てた現代社会の課題と向き合う作品といえるだろう。

世の中には、ヤングケアラー、子育て、高齢者および障がい者への介護、ペットに至るまで《ケア》を必要としない場面はない。そして、それに関わる人々は懸命に無償で励んできたのは“人情”があつてのことなのだ。このような流れはこれまでの道理だが、21世紀になってからは「本当に《ケア》は無償でいいのか？」と、真剣に問いたたすことにしたのが、橋本である。この課題をアートという土俵で視覚化することで、多くの人々を巻き込むことに成功したといえる。

「あなたの《ケア》、魔女が高く買います」という広告を出して近隣住民やアート関係者などにオークションへの参加を促した。会場に入ると「魔女の経済圏へようこそ！」という彼女の挨拶が示すように、《ケア》にまつわる商品群を展示してあり、買い物をするだけで経済が回るになっている。しかし、説明がないままに並んでいるものがオークション向けの商品とSo Tired Collectiveによる「闇市」のアイテムであると理解するのに時間がかかる。

まず、この異空間に入って受け付けをすると、会場だけで通用する魔女貨幣100ウィッチが配給される。しかし、それだけでは買い物ができないため、《ケア》にまつわるエ





ピソードを語ったり、メモを書いたり、画像を共有したり、関連グッズを提示したりすると魔女査定によって支払いが行われる。オークションは、夕方に開催されるため、それまでに“仕事”をして持参金を貯めてから入札する。出品されているものは、普段の生活で《ケア》に関わるストーリーを出品者が物質化（パネルやリストなど）したものであり、入札時に説明がついて理解を深める。

また、「闇市」を司るSo Tired Collectiveは、橋本の個人的ネットワークによって招聘されたメンバーたちで、普段売れないもの（DNA、雨水など）やケアをベースしたシステムが手に入る。例えば、子育て世代のママ・プロジェクトは、お母さんではなく子どもたちの作品を出品していた。それぞれ原価と制作時間に合わせて、お菓子の見返りが値札になっている。それらは「チロルチョコ1個」など、ささやかな品が書いてあり、フェアトレードのマーク付きであることから子どもをフェアに扱おうとしているのは明瞭だ。子どもたちも自分の作品がお菓子里に化けるのを楽しみに待っている。まさに魔法の一手といえる新たな価値創出といえるだろう。

会場は大正時代の床屋だった場所で、アートのスペースとして再生されたが、今回は魔女たちによって《ケア》にまつわる魔界になった。どうやら魔女の処方箋によるアンブル剤だったようだ。

（嘉藤笑子）



Photo by Taro Karibe

橋本美和子 (Miwako Hashimoto)

東京都生まれ。2010年武蔵野美術大学油絵学科卒業。日常生活を問い直すコンセプチュアルアートを制作・発表している。主な作品に、屠畜解体を体験することで死生観や食べることについて再考する「Harvest Room」、SNSをとおして出会った人々の寝床の絵を描くことで現代の親密さを考える「Bedside Stories」など。2021年より、アートコレクティブ「So Tired Collective」を主宰。今回は、大正時代の空き店舗を活用したアートのスペースで、『魔女のオークション&闇市』を開催した。社会に蔓延する「ケア」労働の問題を独自に経済の視点から問い直す意欲作。

絡み合うライフとアート

すみだ向島EXPO 2022を振り返る

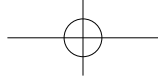
京島を始めて訪れたのは2022年6月だった。最近のことだが、東京に到着すると知人にアートのコミュニティがある地域まちはどこかと聞いた。尾道（広島）で知り合った友人は、京島を教えてくれ、尾道と京島という場所の共通点について賞賛した。ノスタルジックな商店街を中心とした町並み、100年以上の歴史をもつ家屋など、昭和初期に紛れ込んだかのような古めかしい雰囲気は、確かに共通している。また、同時に、建物の保存と活性化の試みには非常に現代的なダイナミックである。博士課程における研究対象として、本地区のアイデンティティを維持するために、市民社会がどのように組織化できるかに興味があった。同地区のアイデンティティを維持するうえで市民社会がどのように組織化されるのかについて特に興味があった。そこで、現地に移り住むことで、そのプロセスを内側から生きてみようと考えた。

まず印象的なのは、同地の界隈が小さく入り組んだ道からなっており、歩行者が多く、現代的で行政的な都市計画から距離を置いていることだ。そのことが、気軽さ（informality）との誘い合っている。この迷路ではすぐに方向感がなくなるものの、曲がり角を通るたびに古民家が見つかる。築100年前後の家屋は、東京ではめずらしいが東京で見つかることはあまりない。それらは記念碑ではモニュメントでなく、有名人の家でもなく、大きな公共施設でもない。ただの商人や職人など庶民の家だ。このような建築的遺産は、ある種の社交性と密接に関係している。知り合いどうしがまちで挨拶したり、玄関の日陰で話したりしている。この地域に参入すると新しく入ってきたころは直接かわり、カフェやレストラン、銭湯など、地域の中心的な場所を案内される……。古民家が空き家となって眠っている場所があっても、別の家屋でほかの家屋には新しい取り組みがあり、その組み合わせに誘惑される。新しい世

代が特に新世代が活発に活動していて、シェアハウスを図書館にしたり、古い長屋を改装して展示場やシェアハウスにしたり、カフェを開いたりしている。日本人だけでなく、外国人も集まっており、メキシコ人の建築スタジオ、フランス人のワインショップ、ポーランド人のアーティスト・ラン・スペース、ネパール人のレストランなども見られる。住人の高齢者、若年者、日本人、外国人が集まるコスモポリタンな地域となっている。

墨田区京島民泊図書館（KAB Library and Residency）のように年間を通して行われるアートの取り組みもあるが、アートで最も活気が見られるのは、アートフェスティバル「すみだ向島EXPO」が開催される10月だろう。伝統的な祭事と同じように、アートフェスティバルは街なかまちのなかで特別な時間を刻んでいる。さらに、建築遺産や街並みの保存を目的としながらも、アートや文化的なものアートの周辺（パラアート）がレストラン、カフェ、銭湯、職人の店などと融合している。つまり、芸術性と社会性（地域開発と都市保全）を兼ね備えたプロジェクトだ。

芸術的な提案という点では、さまざまな展覧会、ワークショップ、パフォーマンスなどに参加することができる。起点となっているのは、地域のアートにかかわる場所、地域に住み、あるいは活動しているアーティストの活性化とともに、外部のアーティスト、さらには国際的なアーティストの招聘だといえる。また、音楽、ダンス、現代アートコンテンポラリー・アートなど、アートの種類によって、高尚さの水準（一般大衆的な公衆に向けたものか、より要求の高い観客に向けたものか）は大きく異なる。近隣に根ざしたプロジェクト（例えば、長く空き家だった床下から発掘されたものの空き家を改修して、最後となった所有者のものの展示や路上観察の映像を利用したドキュメンタ



トマ・ヴォティエ

リーなど)、ほかの現実に目を向けたもの（2011年のロンドンの暴動を演出した映画など）、またパレード、コンサート、ワークショップをきっかけとして、集団で共有する瞬間を作ろうとするものも見られる。

KABが企画した提案は、その多様性を象徴するものであるとともに、芸術的な質という点では最も洗練されたものの一つであった。

西原尚は、フェスティバルの期間中、2つの古い長屋に設置された2つのアートインスタレーションを提案した。自律的に動作するDIYでつくられた楽器が空間には存在し、建築遺産の空虚さや人の不在を音響により強調していた。また、商店街でのパレードを提案し、拡声器で流れる陳腐な音楽を多様で活気のある音に置き換えて、芸術的な祭りのようなものを作り出した。

ビョルン・ベルグツソンはスウェーデンのアーティストで、KABのレジデンス・プログラムを利用して、近隣の古い空き家を借り受けた。そこで彼は、過去15年間に世界中で撮影し、日常生活とともに切りとられた写真で構成したスライドショーを上映した。作品は非常に繊細で、地理的な違いにより展示空間と鮮やかに対照をなしており、ホワイトキューブではなく一軒家で展示することで、イメージの感情的で感傷的な性質を強調していた。レジデンスは2部構成になっており、彼はこの期間を最大限に活用し、毎日散歩しながら東京を撮影し、その素材からその時々のエディションをつくっていった。そこから、永遠に進化していく続けるだろうスライドショーの映像プロジェクトが続いていく。

最後に、フランスの若手アーティスト、レナ・ヒリアー

トボルツは、フェスティバルのために特別な作品を提案した。京島地区の中心に位置するKABでのレジデンスを利用し、日常的に周辺を探索し、その場所や住民と個人的なつながりを持つことで、その場に応じた制作活動を行った。それから、感覚と空想を物語として再構成し、パフォーマンスとともに観客に提供した。ゴーストに導かれながら、曲がりくねった道を散策するというものだ（到着地点では彼女自身が待ち構え、配布されたヘッドホンで案内してくれた）。そして、彼女の個人的なビジョンは美しくもオフビートな創意をもって、すでに知られている、あるいは時々に見られる近隣の地域に重ね合わされた。このパフォーマンスは、私にとって、このフェスティバル全体のイメージとなった。喜びと詩の共有によって、現実を一時的に包み込むことになった。

トマ・ヴォティエ (Thomas Vauthier)

フランス人アーティスト、研究者。エコロジーと社会的活性化のためのツールとしてアートの可能性を追求している。ドキュメンタリーの制作、共同イベントの開催、空間的な展示の構築、オルタナティブ・アートスペースの活性化などを行っている。フランスの美術大学を卒業し、現在はフランスと日本（京都市立芸術大学）の間で研究・創造のための博士課程在籍中。博士論文では、さまざまな規模（芸術祭、アーティスト・イン・レジデンス・プログラム、アーティスト・ラン・スペース、アートプロジェクト）における日本の活性化の実践を探求し、自身もアートプロジェクトを企画している。2022年から2023年にかけて10ヵ月間にわたり京島に滞在し、その経験を振り返る展覧会を現地のギャラリーで開催した（ONAプロジェクト）。

不可視の世界を遊行する、 その可能性

KABの「街まるごとレジデンス」

F. アツミ(Art-Phil)

墨田区京島民泊図書館 (KAB Library and Residency) は、2020年に古民家をリノベーションしてできた民泊施設/会員制図書館としてCOVID-19の世界的な拡大によりまちが封鎖されようとする危機的な状況のなかで開設した。本とともに生活し世界を想像すること、そこから人生のような芸術、そして芸術のような人生とともに生きることをコンセプトとしたアートスペースだ。

KABの誕生と同じくして「すみだ向島EXPO」もまた2020年から現在にかけて開催され、古民家を展示空間とし、リノベーションを行いながら、アートとともに人々が生活を見直す機会をつくってきた。KABによる国際文化交流事業「街まるごとレジデンス」は、COVID-19の脅威が後退しようとする2022年の秋から2023年の春にかけて、「すみだ向島EXPO」を背景に行われた。

ビョルン・ベングツソンは、世界各地への旅とともに生きてきた10年以上のライフ（人生=生活）の写真集をつくるプロセスを振り返りながら、画像の編集効果を実験的に用いてイメージの可能性を検証し、あるいは拡張して、展示するというプロセスを現地の人々との交流のなかで行った。展示空間となった古民家は暗室のように構成され、ライフのイメージが交流によって触発されながら、映像として実現され、物語を紡ぎ出していくことが伝わってきた。

レナ・ヒリアルトボルツは、本に記された文章の一節を日本語とフランス語、さらには人工知能 (AI) の文法やアルゴリズムを翻訳というプロセスのなかで意味を変容させるワークショップをオープンスタジオの訪問者とともにに行った。また、月夜のまちなかをポエトリー・リーディングに合わせてウォーキングを行うという幻想的なパフォーマンスも行った。橋本美和子によるケアと労働のかかわりに着目した「魔女のオークション&闇市」にも通じるのは、日常生活の異質な側面をアートによって可視化しようとする試みだろう。

西原尚は、廃棄物のドラムやプラスチックなどを活用したキネティック（動力を用いた立体作品）、またホワイトノイズを流す拡声器をインストールした。さらに自作の楽器を身体で奏でながら商店街を歩きまわるパフォーマンスを行った。雑音、あるいはノイズとして意識されていなかった音が作品を構成するものの配列のなかでリズムを獲得しながら音楽へと生成してい

く。アーティストの身体をとおして、まちのにぎわいを構成する音律は新たに調律されていくかのようだった。

また、会期中に行われたKAB読書会やKAB TALKsのネット配信は、人々が対面せずに居合わせ、会話し、関係性をつくることを可能にした。日常生活の声を意識させることで、人々のコミュニケーションの質は変容し、声の振幅への共感からネットワークを構築することが可能となる。また、KAB TALKsで配信された「すみだ向島EXPO」参加作家のウェンデルン・ファン・オルデンボルフを介して、KAB読書会は同氏の個展会場となった東京都現代美術館で実施され、すみだのコミュニティはアートヒストリーのコンテクストのなかで議論される機会を得た。

「街まるごとレジデンス」は、COVID-19によって人々の交流が制限され、閉塞と沈黙という暗闇を経験したアートシーンに曙光のような可能性を示している。アートプロジェクトはまちや人々の交流が制限されるという危機的な状況においてもネットワークを構築し、まちなかでのリサーチや展示、ワークショップ、パフォーマンスなどとともにそれまで制限された交流を新たに再開させることができた。交流の制限と解放の間にある世界において、人々は日常生活を振り返りながら別の仕方でも居合わせ、会話し、関係性をつくることができるようになった。

アートプロジェクトとともにそれまで見過ごされていた不可視の世界を振り返り、現実には起こっているものごとを遊行しながら、その可能性を考えること。そして、その可能性をアーティストのイニシアチブにより探究するプロセスにおいて、人々は今後まちとのかかわりをさらに新しくすることができるだろう。

F. アツミ (F. Atsumi)

クリエイション・ユニット Art-Phil、アート・ギャラリー/イベント・スペース monade contemporary | 単子現代。都市経営修士。編集/批評をとおしてアート・哲学・社会の視点から多様なコミュニケーション一般のあり方を探求するとともに、キュレーター/アートマネージャー/ギャラリストとして現在のアート・哲学・社会について考え実践するための展示活動を行っている。

「街まるごとレジデンス」

KAB 国際文化交流事業の本格的始動

嘉藤笑子

2022-2023年にKAB Library and Residency (以下KAB)は、国際文化交流事業「街まるごとレジデンス」の一環で国内外の作家4人によるアートプロジェクトを展開した。各作家の創作活動は、まったく異なるアプローチであることから、多様なメディアによる多彩な表現が展開された。今回の中心的な機会は、墨田区京島地域で2020年から継続的に開催しているくすみだ向島EXPO 2022> (以下、エキスポ) で発表することだった。墨田区は、スカイツリーというモニュメントが建立されたことで観光地としても名乗りを上げたが、この下町は、いまでも大正・昭和の長屋建築が残るノスタルジックな風情があり、路地裏で子どもたちがけん玉をして遊んでいるようなタイムスリップした場所である。この地域の歴史・景観・住民たちが、このまちで生きている様子を作品に加味していくことは、サイト・スペシフィックでダイナミックな表現につながったといえる。

正直に言えば4年間におよぶパンデミックによって、世の中はすっかり閉塞的で疲弊してしまっていた。その厳しい状況でもKABは、オンライン読書会やワークショップ、ブックメイキングなどの独自プログラムを実施することで継続してきた。毎年10月に開催するエキスポには、初年度から積極的に関与し、拙者は実行委員として実質的なアートプログラムを企画してきた。したがって「街まるごとレジデンス」は、エキスポと同時期に同地域で展開することで大きな協力体制を築くことができたといえるだろう。

本エキスポで発表したアーティストはレナ・ヒリアルトボルツ (マルセイユ)、ビョルン・ベングツソン (ストックホルム)、西原尚 (横浜) の3人である。それぞれのプロジェクト詳細は別ページに割いているので、ここでは概要のみにするが、墨田区京島の長屋、商店街、公園などの複数拠点において展覧会・ワークショップ・パフォーマンス・スタジオオープン・交流会などを各自が多様な表現で展開した。およそ1か月間半というタイトなスケジュールのなかで多彩な事業を能力の高いアーティストたちによって実施することができた。特にレナは、D.D.A. Contemporary Arts (以下DDA,マルセイユ) と日仏交換プログラムの一環で参加したアーティストだった。その交換事業として2023年は、日本からマルセイユに橋本美和子を派

遣することになった。DDAは、予定していた受入アーティストを反故にして異なるアーティストを要求してきたり、合意していたスケジュールを変更したり、双方の計画を白紙にもどしたりするなど、混乱させられることが多々あったが、困難を乗り越えて本事業を完結することでKAB国際文化交流事業は大きく成長できた。

KABは、開設当時からアーティスト・イン・レジデンス (AiR) を主眼とする機関として設立したが、コロナによって海外事業は一斉に中断してしまっていた。だが、「街まるごとレジデンス」を実施することによって国際交流が本格的に開始できた。KABのAiR事業は、2022年末から中短期間のアーティストからの滞在申請が増えている。今後は、東京の国際文化交流拠点のひとつとして、さらにAiRを発展的に継続していきたいと考える。

さて、2023年の橋本美和子の『魔女のオークションと闇市』は、キラキラ橘商店街の空き店舗を活用した2日間限定の事業だったが、エキスポの協力によって地元からの参加者が多く集うことができた。ちょっと不思議なタイトルのイベントに好奇心をもって見に来てもらう姿は、下町ならではの「つながり」が可能にした結果である。さまざまな街のポテンシャルを文化事業に活かすことで、街全体が、アートという娯楽を手に入れることができたのではないかと考える。KABは、その処方箋を国際的な視点で描いていくことで、大きく空に飛翔するアーティストたちを支援していけるのではないかと考える。

嘉藤笑子 (Emiko Kato)

東京都生まれ。跡見学園女子大学／武蔵野美術大学／法政大学兼任講師。東京・横浜にてArt Autonomy Network[AAN] (2005～) を組織しアーティストネットワークの構築を手掛ける。多数の企画展やアートプロジェクトを実施。2020年1月にKAB Library and Residency (KAB) というアーティスト・イン・レジデンスおよび会員制図書館を開設した。コロナ禍においても、「すみだ向島EXPO」(2020、2021、2022) に参加し、展覧会、読書会、ワークショップなど多岐にわたる活動を行った。これまで、墨田、横浜、沖縄、神山などでも数多くの地域プロジェクトに携わってきた。

KAB TALKs

アーティストとの会話から広がるまちの特性

国際文化交流事業「街まるごとレジデンス」の実施期間中、墨田区京島民泊図書館KAB Library and Residency（以下KAB）にかかわりのあるアーティスト、学生、有識者とともにトークイベント、KAB TALKsを行った。

まず「No.0 2022年10月13日 ドクメンタ15報告」では、嘉藤笑子（KABディレクター）自身が、2022年6月18日～9月25日に開催されたドイツ・カッセルの「ドクメンタ15」の視察訪問について報告した。インドネシアのアート・コレクティヴ、ルアンルパを芸術監督として向かえた芸術祭をめぐる多文化共生におけるアジア発のディレクションにおいて、戦争や紛争をはじめとする世界的な課題についてアーティストとともに観客が世代や属性を超えて向き合い、語り合い、協働することの重要性を語った。

「No.1 2022年10月16日 Björn Bengtsson」では、世界各地を旅するなかで私生活とともに撮影した写真を町家でスライドショーとして展示するというKABのプログラムについて、京島の風景の印象とともに話された。「No.2 2022年10月20日 松尾孝之」では、「すみだ向島EXPO2022」で展開した「考現学 発掘 床下」について、大正時代に建てられた長屋の畳や床板を剥がすことで見つかったオブジェクトについて言及するとともに、自身のニューヨークでの生活を振り返りながら京島界隈で考えたことが語られた。

「No.3 2022年10月22日 西原 尚（音の美術）」では、京島の古い鉄工所や木工所のなかで開催したサウンド・インスタレーションとキラキラ橘商店街でのパフォーマンスをとおして考察した京島のサウンドスケープについて語られた。また「No.4 2022年10月25日 Wendelien van Oldenborgh」では、東京都現代美術館で開催された個展「ウェンデルン・ファン・オルデンボルフ 柔らかな舞台」に際して行った日本人フェミニストをめぐる逸話、また京島のウラダナでのビデオ・インスタレーション「From Left To Night」において描かれた有色人種への偏見や差別の動向について意見が交わされた。

一連のプログラムでは、東京の下町で開催された〈すみだEXPO2022〉の各所で繰り広げられたアーティストたちの作品の言及により、京島というまちの特異性を世界各地のエピソードや情景やアートともに見直す試みとなった。配信者やゲスト、インタビュアーの声をとおして京島、向島というまち並みや人々の暮らしについて、時代を超えて思いをめぐらすことができた。

（F. アツミ）



KAB 読書会

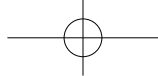
地域、オンライン、美術館へと拡張する本を媒介とした交流

墨田区京島民泊図書館KAB Library and Residency（以下、KAB）は民泊施設とともに展覧会、イベント、ワークショップやオンライン読書会を行っている。主宰の嘉藤笑子によればコロナ禍によって閉鎖された環境のなかで思いついた「苦肉の策」だったというが、関東周辺のみならず海外や地方からの参加者が増えて、交流機会に広がりを見せている。これまで、クレア・ビショップによる『人工地獄 現代アートと観客の政治学』（大森俊克 訳、2016年、フィルムアート社）、『ラディカル・ミュゼオロジー』（村田大輔 訳、2020年、月曜社）、ボリス・グロイスによる『アート・パワー』（石田圭子ほか訳、2017年、現代企画室）、またニコラ・ブリオーによる『ラディカント グローバリゼーションの美学に向けて』（武田宙也 訳、2022年、フィルムアート社）などを輪読形式で読み進めてきた。また、ドゥルーズ・ガタリやミシェル・フーコーなどの現代思想に関する勉強会などもあり、現代アートとのかかわりからの議論が見られる。

「街まるごとレジデンス」の期間中に行われたKAB TALKs「No.4 2022年10月25日 Wendelien van Oldenborgh」をきっかけとして、東京都現代美術館で開催されていた個展「ウェンデルリン・ファン・オルデンボルフ 柔らかな舞台」では特別公開プログラム「KAB読書会：参加型アートを紐解く」が開催された。当日は、ソーシャル・エンゲージドアートとのかかわりのなかで美術館の観客とともに現代アートの作品をもとにしたアーティストの制作のスタイルやコミュニティにおける対話の可能性などについて議論が深められた。京島に拠点を置くKAB読書会にオンライン・ミーティングで参加した東京や関西圏各地の参加者の議論が東京都現代美術館の参加者らとの問題関心に接続されるとともに、ウェンデルリン・ファン・オルデンボルフの作品から見られる現代のアートや社会とのかかわりが読書会の議論をとおして拡張される機会となった。

(F. アツミ)





Labyrinth Tracing Sumida's Convictions

Léna Hiriartborde

Léna Hiriartborde came to Japan as a kind correspondent from D.D.A. Contemporary Art (DDA) in Marseille. Shortly after her arrival, she gave a workshop and presentation at the ex-KEIKOBA (gymnasium) art space in Kyojima, Sumida. Participants were given a white map in hand for two days on the 23rd (Fri) and 24th (Sat) of September 2022 and were asked to take a picture of information that caught their attention to share it in text form by taking a smartphone camera picture or writing text. As the venue was renovated from an old apartment to an art space with residential facilities on the avenue, it was interesting to note that the participants were divided into two groups: those who crossed the main road and those who went into the back alleys, which was interesting in terms of understanding the structure of the town. The fact that the participants were not simply photographing objects or scenes proved that Kyojima has its charms. It should also be added that they were bilingual and multinational.

During her stay, her studio was in the institution called KAB Library and Residency (KAB). As a participating artist in the Sumida Expo 2022, she held an open studio for a few weekends. Visitors extract passages from KAB's collection that leave an impression on them, and Léna translates them into French using AI's translation function. The text is then translated into Japanese again using AI. The AI then translates the text into Japanese again, and a text that differs from the original appears. The AI then creates new sentences by connecting these digital errors with the original corrections in the book. The final result was the creation of a book from a different angle.

In the performance 'In the 15th Night, the 25th hour' on the last day of the residency, Léna, a bit of a 'wonder girl', was an appropriate figure for the Sumida Labyrinth. Still, her final performance was a back-alley tour with an audio guide leading the audience through the city center in a poetry reading dedicated to the moon. The performance was like a backstreet tour

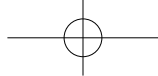
of the city, with an audio guide leading the audience through the streets. She was on the roof of a building called CHAYA on the Kirakira Shopping Street in Kyojima, from which she transmitted audio via wifi. The audience walked through the alleyways of Kyojima, listening to the audio and holding the earphones that were distributed to their ears. The audio was a French poem, which was not directly related to the directions, and a Japanese digital voice, translated by AI, alternating between the two. However, its route was led down and was not led guided by an audio guide but by illustrations of rabbits and the moon, which the artist had pasted on the street beforehand. In other words, while listening to the artist's poem and looking for the illustrations, the audience headed for the final destination, the roof of the building. When they arrived, they found themselves in a place where they could see the townscape of Kyojima like a sea of clouds and a beautiful scene with the Sky Tree shining in the nightscape.

The artist-in-residence from France spent most of the artist's time concentrating on her work. Freed from her hectic schedule, the place might have been like an endorsement on a map for Léna.

(Emiko Kato)

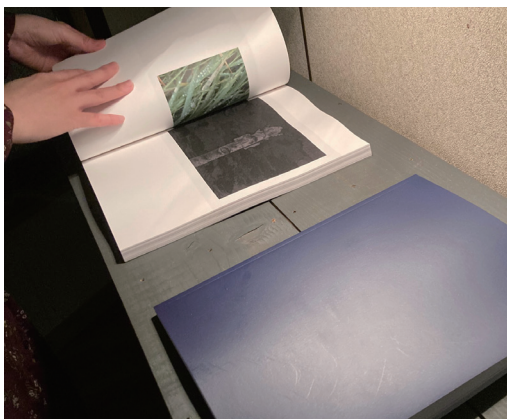
Léna Hiriartborde

Born 1992, based in Marseille. Project-based artist working through research and workshops. She has exhibited the results of her research using text, performance and multiple materials. After graduating from the College of Fine Arts in France, she has conducted research in Chile, Colombia, India and other countries while carrying out projects such as exhibitions and workshops. She visualised her insights into the local society in those places and their indigenous culture and environment. In this project, she conducted research in the downtown area of Tokyo, followed by workshops and performances, while staying in a community and a converted tenement house in a densely wooded area.



Visual Space in an Old House from the Everyday to the Extraordinary

Björn Bengtsson



Björn Bengtsson approached KAB Library and Residency (hereafter KAB) in 2021 when the world was amid a blockade of cultural public facilities and projects due to Covid-19. KAB was to cease its activities immediately after its opening in January 2020, but to start some events like an online Book Club and artists' workshops, etc., At the time, the overseas residency was in the process of winding down, but Bengtsson wanted to stay in Japan to complete his trilogy of photographic books.

Eventually, the artist would not officially take up his residency until 2022, when the pandemic had calmed down slightly. Since Björn had studied briefly at Tsukuba University for three months, he had a strong feeling for Japanese culture and was looking forward to being in Tokyo for the residency. The mildness of his personality meant that he could open up and build friendships with his neighbours and artists, which was a plus for his production.

Bengtsson, who has worked mainly with photography for many years, is highly aware of video works. Therefore, he displayed the results, including a 50-minute DVD he edited in Sweden to perfect it and two books of photographs from the Indigo series. The video, a diary of images from more than ten years of life, can be inverted by equalisation and temporarily become a different space. Still, its essential attitude is to look at the universal scene of everyday life.

This time, I offered the artist an entire old house as an exhibition venue but did not expect to darken the room

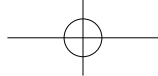
and crush the landscape of the Japanese house to fix the site-specific. Therefore, creating an installation that used the Showa-era landscape of the downtown area would be desirable. Still, stripping away extreme elements from the exhibition environment shows the artist's intention to concentrate on his work. Indeed, despite the long duration of the images, it was possible to view them leisurely while sitting on the tatami mats. A cosy space was created even in the dark room.

In addition, although the artist carried a camera with him daily, his days were spent exploring the town, observing people and encounters, rather than focusing on filming in particular. As evidence of this, the social event on his last day was the most exciting. His artist friends came in a group from Sweden, and there were also guests from abroad, including Wendelien van Oldenborgh, who had been staying on Kyojima, and French researcher Thomas Vauthier, and above all, about 20 to 30 people, including artists participating in the Sumida EXPO 2022. He enjoyed getting together, as I found at the end, and the outcome of Björn's residency was networking which I found at the end.

(Emiko Kato)

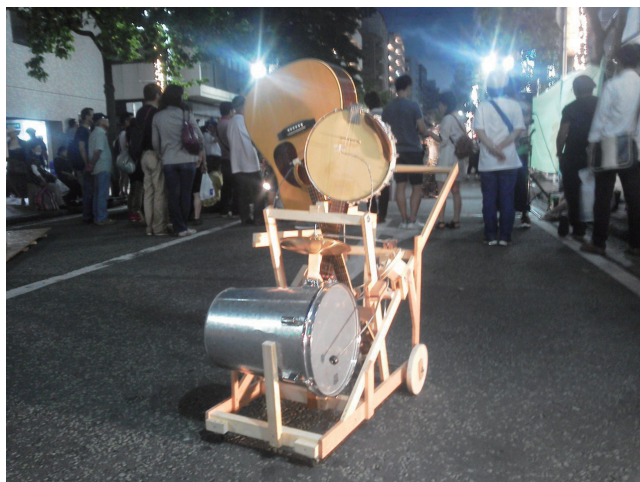
Bjorn Bengtsson

Born 1982, based in Stockholm. The artist working mainly with video, photography and conceptual art. After graduating from the Department of Photography at the University of the Arts Cumbria, UK (2001-2003), Bjorn Bengtsson went on to study photography at the Royal College of Art in Stockholm. He completed postgraduate studies at the Royal College of Art in Stockholm (2013) and postgraduate studies (2015) in order to master photography. Prior to his postgraduate studies, he had visited Japan as a research student at Tsukuba University (2011, for three months). In this exhibition, he showed his video works in an old house from the Showa period and exhibited two photography books published in 2021.



Tuning the Conviviality of the City

Nao Nishihara



Nao Nishihara has been presenting works in the complex artistic field of "sound art" mainly with sound. In the program, Nishihara exhibited two separate installations in renovated tenement buildings that used to be woodworking shops and an ironworks, which is said to be the oldest in the Kyojima area, and performed in the Kirakira Tachibana Shopping Street.

In "Serious Machine (Kyojima)," exhibited in a tenement house that used to be an ironworks, a kinetic (powered three-dimensional work) consisting of rails, drums, plastic barrels, and cans was installed on the first floor, and the audience activated the kinetic by pushing a bottom for the switch. On the second floor of the building, a work inspired by Indonesian scarecrows called "Pindekan" was placed, and a windmill attached to the end of a pole makes a metallic sound. Each kinetic, like an animal, moved slowly forward or lightly circled, weaving a soundscape of scrap wood.

An installation work of giant loudspeakers, "Breath," was set in a tenement building that used to be a woodworking shop, and generated decaying white noise in various directions throughout the indoor space. The white noise is played back from the giant loudspeakers, handmade sound synthesizers, as if they were breathing. Conversations, people's faces,

and signs of the time when the tenement was still used as a woodworking shop seemed to appear like fog with the white noise played from the loudspeaker, then slowly faded away and disappeared before long.

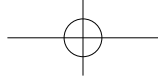
The performance by Nishihara and the other two artists, who lightly paraded through the Kirakira Tachibana Shopping Street, mixed with, or even drowned out the songs playing from the shopping street speakers, and breathed new life into the convivial atmosphere of the town. The cymbals scraped against the pavement, and the one-handed improvisation of the transverse flute and drums stirred up various festive sounds through the body of a single person, brightening the spirits of the townspeople.

Nishihara's work and performance, together with the sounds emanating from the objects and bodies, tuned each sound/voice that wove the soundscape of the bustling town, and spun out music specific to the site from among the noises.

(F. Atsumi)

Nao Nishihara

Nao Nishihara's work spans multiple artistic fields, with sound and art as the main content. His creative activities cross multiple genres, including kinetic (powered three-dimensional works), installation and performance. His creative motivation for sound is particularly strong, and he has developed his work into 'sound art' by connecting bodies and objects to sound. Some of his works can be interpreted as media art or sound art, and his expression is full of originality. This time, the two installations were held at two locations where architects had spontaneously renovated a corner of the oldest tenement building in the Kyojima area, as well as a performance in the shopping arcade.



"Witches' Auction & Black Market" for the Economic Sphere of "CARE"

Miwako Hashimoto

On the 20th (Sat) and 21st (Sun) May 2023, the art project "Witches' Auction & Black Market" by Miwako Hashimoto was held for two days at Barber Araki, a former shop in the Kirakira Tachibana Shopping Street. As a conceptual artist, Miwako Hashimoto, who is recently looking at socially engaged art and let artists collective named "So Tired Collective" be involved, added her circumstances to the project, which can be seen as a work that confronts the issues of contemporary society by shedding light on the problems of "unpaid work" and "care".

No situation in the world does not require "care", from young carers, child-rearing, caring for the elderly and disabled to pets. And the people involved have worked hard and gratuitously because of their "humanity." This has always been the case, but in the 21st century, the question has been asked earnestly: "Can care to be provided free of charge?" Miwako Hashimoto has decided to ask this question seriously. By visualising this issue in the context of art, she succeeded in involving many people.

The advert, "Your 'care', the witches will buy it at a high price." The auction was attended by neighbourhood residents and people involved in art. As she entered the venue, her greeting, "Welcome to the Witches' Economic Circle!", and a range of products related to Care are on display in the store, and the economy is supposed to revolve around shopping. However, it takes some time to realise that the items on display without explanation are auction items and 'black market' items by the So Tired Collective.

First, when you enter this different space and accept the ticket, you are given a ration of 100-witch coupons, which are only valid at the venue. However, shopping is not possible with just that; payment is made by witch assessment if you tell an episode related to "Care", write a note, share an images or present related goods. The auction takes place in the evening, so you must do some "work" and save up a dowry before bidding. The items on display are the

materialisation (panels, lists, etc.) of stories related to "care" in everyday life, which are explained to the bidders when bidding to deepen their understanding.

The So Tired Collective, which governs the 'black market', is a group of members invited by Hashimoto's network, where items not usually sold (DNA, rainwater, etc.) and care-based systems are available. For example, the Mama Project, a project for mothers raising children, exhibited the work of children, not mothers. Each has a price tag in return for sweets according to cost and production time. They were marked with a small item, such as "one Tyrol chocolate", and the fact that they were kept Fairtrade made it clear that they were trying to treat the children fairly. The children are also looking forward to seeing their creations turned into sweets. It is a magic move, a new value creation.

The venue is a former barbershop from the Taisho era (1912-1926), which has been rehabilitated as an art space, but this time it has been turned into a magical world related to 'care' by the witches. It was an ampoule with a witch's prescription.

(Emiko Kato)

Miwako Hashimoto

Born in Tokyo and graduated from Musashino Art University in 2010 with a degree in oil painting. She creates and presents conceptual art that questions everyday life. Major works include 'Harvest Room', which reconsiders views of life and death and eating through the experience of slaughter and dismemberment, and 'Bedside Stories', which considers contemporary intimacy by drawing pictures of the beds of people she has met through SNS. Collective'. This time, they organised a 'Witch Auction & Black Market' in an art space that was converted from a vacant Taisho era shop. This ambitious work uniquely interrogates the issue of 'care' labour prevalent in society from an economic perspective.

Life and art entangled, recounts of Sumida Mukojima EXPO 2022

Thomas Vauthier

I visited Kyojima for the first time in June 2022. Recently I arrived in Tokyo, I asked my acquaintances which districts were interesting in terms of their art communities. A friend I met in Onomichi (Hiroshima) told me about Kyojima, praising the similarities between the two places. Indeed, they share the same vintage vibe, immersing the visitor in the early Showa era: same layout around a melancholic shotengai (shopping street), the same architectural heritage (with houses of 100 years or more). And, at the same time, very contemporary dynamics, as for the attempts of preservation and actualization of these buildings. Due to my doctoral subject, I was particularly interested in the way in which civil society could organize itself in order to try to maintain what makes the identity of the district so particular. So I decided to move there, to try to live these processes from the inside.

What strikes you at first sight is the construction of this neighborhood, made of small winding streets, which makes it pedestrian and preserved from urbanistic plans too authoritarian and modern. It is an invitation to informality. You can easily get lost in this maze, discovering old houses at every turn. Houses of about 100 years old is rare enough in Tokyo to be noticed. They are not monuments for all that, houses of dignitaries or big public buildings, they are common houses, of merchants, of craftsmen, of ordinary citizens. This architectural heritage goes hand in hand with a certain form of sociability, which impresses from the start: people seem to know each other, greeting each other in the street or chatting in the front of their houses. When you are new in the district, you are directly taken in charge, you are shown the central places of the community: a café, a restaurant, the sento (public bath). Because if some of these old houses are vacant, in latency, others shelter new initiatives and we can only be seduced by this crossbreeding. The new generation is particularly dynamic in this district, creating a shared house serving as a library, renovating an old nagaya to transform it into a place of exhibition, opening a café... The district attracts Japanese but also internationals like me - we discover a Mexican architecture studio, a French wine shop, a Polish artist-run-space, a Nepalese restaurant. It's a cosmopolitan neighborhood, made of old people who have lived there all their lives, young people, Japanese, foreigners...

Although there are several art initiatives that take place throughout the year (like KAB), the most lively time artistically speaking is the month of October, when the Sumida Mukaishima EXPO art festival takes place. Like traditional festivals, this one marks a special moment in the district. Moreover, it allows to federate artistic and para-artistic initiatives (restaurants, cafe, public baths, artisans' shop are part of the program) while highlighting its architectural heritage, with the aim of preserving it. In other words, a project that is both artistic and socially committed (community development and urban preservation).

In terms of artistic proposals, one can attend a wide variety of exhibitions, workshops and performances. By their origin: as much the activation of local artistic places, of artists living or working in the district, as to invitations made to external artists, even international. But also by the type of art: from music to dance, to contemporary art; passing by very different levels of refinement (general public or more demanding audience). Some projects are based on the neighborhood (for example, the transformation of an akiya (vacant house) and the exhibition of all the objects of the last owner; or documentaries using locally found images), others are more windows on other realities (such as a film staging the London revolts of 2011) and finally some try to create moments of collective sharing, on the occasion of parades, concerts or workshops.

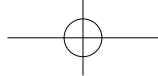
The proposals organized by KAB represent this diversity, while being among the most refined in terms of artistic quality. Nao Nishihara proposed two art installations, visible during the whole festival, located in two old nagaya (wooden tenement house) - inhabiting the space with his DIY instruments, which work autonomously, underlining the vacancy of this architectural heritage, the absence of people in a sonic way. He also proposed a kind of parade in the shotengai, replacing the retro music normally played by a varied and galvanizing din - generating a kind of artistic matsuri.

Björn Bengtsson is a Swedish artist who took advantage of KAB's residency program to take over another old vacant house in the neighborhood. There he showed a slide show composed of photographs he has taken over the past 15 years around the world, drawn from his daily life. His work is highly sensitive and contrasts sharply with the exhibition space, due to the distinct geographies; however, exhibiting in a house, not a white cube, reinforced the emotional and sentimental nature of the images. His residency was in two parts, as he made the most of this period by photographing Tokyo during long daily walks - material from which he is currently composing an edition and also continuing his forever evolving slide-show project.

Finally, Léna Hiriartborde is a young French artist who proposed a work specifically for the festival. Working exclusively in situ, she took advantage of her residency at KAB, located in the heart of the Kyojima district, to explore the surroundings on a daily basis and make personal connections with the places and its inhabitants. She then recomposed her sensations and fantasies into a narrative, which she offered to the spectators during a performance: a stroll through the winding streets, guided by her ghost (she herself was waiting for us at the arrival point and directed us through the headphones that were distributed to us). Her personal vision was then superimposed on the neighborhood, already known or discovered on occasion, with a beautiful and offbeat inventiveness.

This performance is thus for me the image of the festival as a whole: the temporary envelopment of reality by a joyful and shared poetry.

Thomas Vauthier is a French artist and researcher. In this double practice, he explores the potential of art as a tool for ecological and social revitalization. He produces documentaries, collaborative events, builds spatial displays and animate alternative art places. He graduated from a French art school and is now enrolled in research-creation PhD programs between France and Japan (Kyoto City University of the Arts). His thesis focuses on the exploration of Japanese revitalization practices at different scales (art festivals, artist-in-residence programs, artist-run-spaces, art projects), while he is participating and organizing art projects himself. He lived in Kyojima for 10 months between 2022 and 2023, and recently organized an exhibition at a local gallery (ONA project) recounting his experience.



Traversing through the Invisible World Retrospectively, and its Possibility

- KAB's "Whole Town Residency"

F.Atsumi

KAB Library and Residency was founded as a residential facility/membership library created by renovating an old private house amid a crisis where the town is about to be locked down with the global expansion of COVID-19 in 2020. The art space is based on the concept of living with books and imagining the world so that living art as life, and life as art.

The Festival of Sumida Expo coincided with the launch of KAB in 2020 and has continued to the present, utilising and renovating old private houses as exhibition spaces to create opportunities for artists and audiences to rethink their lives with art. The international cultural exchange project by KAB, the "Whole Town Residency," took place before the receding threat of COVID-19 as a part of the Sumida EXPO 2022 from the Autumn of 2022 to the Spring of 2023.

Björn Bengtsson, reflecting on the process of creating a photo book of more than 10 years of life along with his travels around the world, experimented with the editing effects of images to verify or expand the possibilities of the images, and exhibited them in exchange with the local people. The old house that served as the exhibition space was configured like a darkroom, and the images of the lives, inspired by the exchange, were realized as images, conveying the weaving of a story.

Léna Hiriartborde conducted a workshop with visitors at the open studio, transforming the meaning of passages from a book in a process of translation between Japanese and French, as well as between the grammar and algorithms of artificial intelligence (AI). A fantastical performance of walking through the city on a moonlit night to the accompaniment of poetry readings was also held. Similarly, Miwako Hashimoto's "Witches' Auction & Black Market," which focused on the relationship between care and labor was an attempt to visualize the different aspects of daily life through art.

Nao Nishihara created kinetics (powered three-dimensional works) using discarded instruments and plastic junks, as well as installations of loudspeakers that emit white noise. He also walked around the shopping street playing his own instruments with his body. Sounds that had not been consciously considered as noise or noises were transformed into music while acquiring rhythm in the array of objects that made up the work. Through the artist's body, the soundscape that makes up the bustling city seemed to be tuned anew.

The KAB book club and KAB TALKs broadcast over the internet during the exhibition made it possible for people to meet, talk, and create relationships without having to meet face-to-face. By making people aware of the voices of everyday life, the quality of people's communication is transformed, and networks can be built out of empathy for the amplitude of voices. In addition, through Wendelien van Oldenborgh, an artist participating in the "Sumida EXPO 2022" delivered through KAB TALKs, the special event of

KAB Book Club was held at the Museum of Contemporary Art Tokyo on the occasion of her solo exhibition. The event gave the audience including participants from Sumida community an opportunity to discuss over the socially engaged art.

The "Whole Town Residency" shows the possibility of a dawn light in an art scene that has experienced the darkness of stagnation and silence due to COVID-19, which restricted people's exchange with each other. The art project is able to build a network even in a critical situation of restricted interaction between the city and its people, and to reopen the previously restricted interaction through research, exhibitions, workshops, and performances in the city centre. In a world between restricted and liberated exchanges, people found that they could meet, converse, and create relationships in other ways while reflecting on their daily lives.

Reflecting on the invisible world that had been overlooked until then with the art project, and considering the possibilities of such a world while retracing things that are happening in reality. In the process of exploring these possibilities through the initiative of artists, people will be able to renew their relationship with the city in the future.



F.Atsumi

Creation unit Art-Phil, art gallery/event space monade contemporary. Master of Urban Management. As an editor/critic/publisher, he explores various forms of communication in general from the viewpoints of art, philosophy, and society, while as a curator/art manager/gallerist organising exhibitions to investigate and practice art, philosophy, and society at present.

"Whole Town Residency"

-KAB International Cultural Exchange Programme in Full Swing -

Emiko Kato

In 2022-2023, KAB Library and Residency (hereafter referred to as KAB) developed the international cultural exchange projects by four artists from both Japan and abroad for The Whole Town Residency' which is supported by Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture). In this project, each artist's creative practices are entirely different in approach, resulting in various media expressions. The central opportunity was to present the work at the Sumida EXPO 2022, held continuously since 2020 in the north part of Sumida.

Although Sumida has become a tourist destination with the erection of the Sky Tree monument, this area still retains a nostalgic atmosphere with a row-house architecture built in Taisho and Showa-era. There is a place where children play Kendama, a traditional Japanese toy in the back alleys, a throwback to a bygone era. Adding to the work, the history of the area, its landscape and the way the inhabitants live in this town have led to a site-specific and dynamic expression of their creativity.

The world had become wholly stagnant and exhausted after four years of pandemic. Even in that difficult situation, KAB has continued by running its programmes, such as an online reading club, workshops and bookmaking, the same as exhibitions and art projects. Since its first year, we have been actively involved in the Sumida Expo, held every October. I have organised a substantial arts programme as a member of the organising committee. Therefore, the 'Whole Town Residency' has been developed in the same area at the same time as the Sumida Expo 2022, enabling a great deal of cooperation to be established.

The three artists presenting at the Expo were. Léna Hiriartborde (Marseille), Björn Bengtsson (Stockholm) and Nao Nishihara (Yokohama). The details of each project are given on a separate page, so this section will only provide an overview. Still, each of the artists developed their diverse expressions through exhibitions, workshops, performances, studio openings and exchange events in several locations, including old row houses, a shopping street and parks in Kyojima, Sumida, Tokyo. It can be said that skilful artists could carry out a wide variety of projects within a tight schedule of approximately one and a half months. Léna, in particular, was an artist who participated in the Franco-Japanese exchange programme with D.D.A. Contemporary Arts (hereafter D.D.A., Marseille). In 2023, Japan was to send Miwako Hashimoto to Marseille as part of the exchange programme. Unfortunately, the D.D.A. often confused us by demanding different artists from the planned recipients, changing the agreed schedule, and reneging on plans made by both sides. However, KAB overcame the difficulties and completed the project, and the KAB international cultural project has grown significantly.

Although KAB established its inception as an organisation focusing on artist-in-residence (AiR), its overseas projects

were interrupted by Covid-19 soon after the official opening of the institution. Therefore, the international exchange could begin earnestly with implementing the 'Whole Town Residency', and KAB's AiR project is receiving an increasing number of applications from international artists for medium to short periods from the end of 2022. In the future, we would like to develop further and continue the AiR programmes for international cultural exchange as a part of Tokyo member.

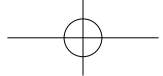
In the meantime, Miwako Hashimoto's 'Witch's Auction and Black Market' on 20th -21st May 2023 was a two-day project that utilised an empty shop at the Kirakira Shopping Street. Still, with the cooperation of the Sumida Expo, it attracted many participants from the local area. The fact that people came to see the event with a slightly mysterious title out of curiosity resulted from the "connections" of the social issue that can only be found in the downtown area.

By utilising the various potentials of the town for cultural projects, the town as a whole may have gained access to the aphrodisiac of art. KAB believes that drawing up the prescription from an international perspective can support the artists flying high into the sky.



Emiko Kato

Born in Tokyo. Concurrently lecturer at Atomi University, Musashino Art University and Hosei University. She directed the Art Autonomy Network [AAN] (2005-) in Tokyo and Yokohama, building artist networks. She has curated numerous exhibitions and art projects. In January 2020, she opened KAB Library and Residency (KAB) for the Artists in Residency and art projects relating art books. While Covid-19, KAB also organised a wide range of activities for the Sumida EXPO (2020, 2021, 2022), including exhibitions, Book club and workshops. He has also been involved in numerous community projects in Sumida, Yokohama, Okinawa and Kamiyama, so on.



KAB TALKs

The Characteristic of the City Spreads through Conversations with Artists

During the international cultural exchange project "Whole Town Residency," KAB TALKs, a talk event, was held with artists, MA students, and experts involved in the KAB Library and Residency (KAB) at Kyojima, Sumida, Tokyo.

First, in "No. 0 October 13, 2022 Documenta 15 Report," Emiko Kato (KAB Director) herself reported on her inspection visit to Documenta 15 in Kassel, Germany, which was held from June 18 to September 25, 2022. In the direction from Asia in multicultural coexistence over the art festival with Indonesian art collective ruangrupa as artistic director, she talked about the importance of the audience facing, discussing, and collaborating with artists on global issues such as war and conflict, transcending generations.

In "No.1 October 16, 2022 Bjorn Bengtsson," he talked about KAB's program of exhibiting a slide show in a townhouse of photographs taken with his personal life during his travels around the world, along with his impression of the landscape of Kyojima. In "No.2 October 20, 2022: Takayuki Matsuo," he talked about the "study of modern societies: Excavation Under the Floor," which was developed at the "Sumida EXPO 2022," referring to objects found by removing tatami mats and floorboards from a row house built in the Taisho era (1912-1926), as well as his thoughts on the Kyojima neighborhood looking back his own life in New York.

In "No.3 October 22, 2022: Nao Nishihara (Sound Art)," he discussed the soundscape of Kyojima, which he examined through sound installations held in old iron and wood factories in Kyojima and a performance in the Kirakira Tachibana Shopping Street. In "No.4 October 25, 2022 Wendelien van Oldenborgh," she discussed an anecdote about Japanese feminists on the occasion of her solo exhibition "Wendelien van Oldenborgh: unset on-set" at the Museum of Contemporary Art Tokyo, and the trends of prejudice and discrimination against people of color depicted in the video installation "From Left To Night" at Uradana, old tenement house in Kyojima.

A series of programmes, referencing artists' works from various parts of Sumida EXPO 2022 held in downtown Tokyo, attempted to review the characteristics of Kyojima as a city with episodes, scenes, and art from around the world. Through the voices of the distributors, guests, and interviewers, the audience was able to reflect on the townscape of Kyojima and Mukojima and the lives of its people throughout the ages.

(F. Atsumi)

KAB Reading Club

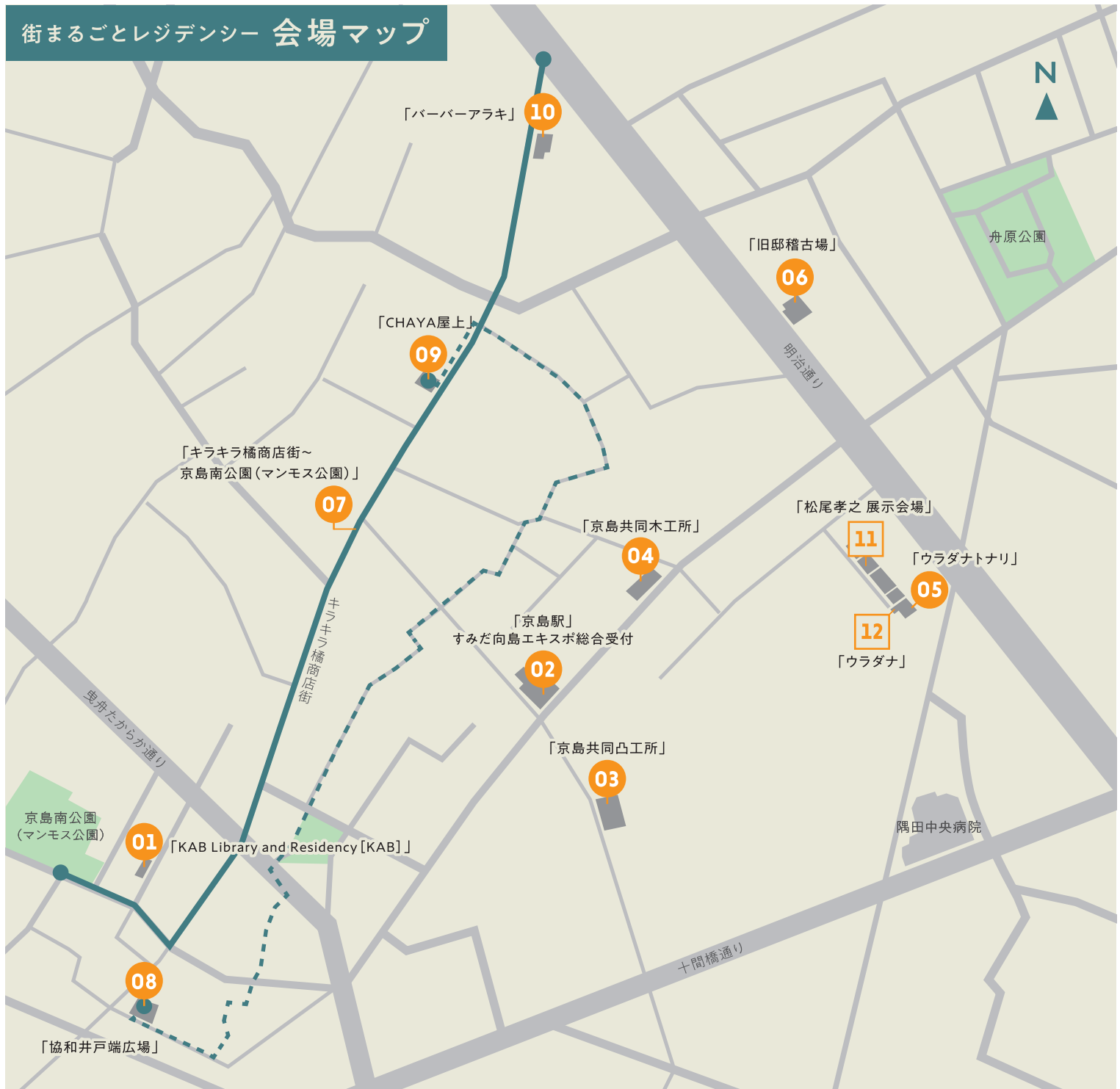
Book Mediated Exchange Extending to the Community, Online, and Museum

KAB Library and Residency (KAB), a private library in Kyojima, Sumida, hosts exhibitions, events, workshops, and online readings sessions together with its accommodation facilities for the AiR programme. According to the director, Emiko Kato, the book club via online was a "desperate measure" that she came up with in an environment closed due to the COVID-19 pandemic, but the number of participants from not only the close area but also from overseas and other regions has been increasing, providing a wider range of opportunities for exchange. So far, there have been several reading sessions: *Artificial Hells: Participatory Art and the Politics of Spectatorship* by Claire Bishop (translated by Toshikatsu Omori, 2016, Film Art), *Radical Museology* (translated by Daisuke Murata, 2020, Getsuyosha), *Art Power* by Boris Groys (translated by Keiko Ishida etc, 2017, Gendai Kikakushitsu), and *Radicant* by Nicolas Bourriaud (translated by Chuya Takeda, 2022, Film Art), among others. There have also been study groups on contemporary thought by Deleuze and Guattari, Michel Foucault, and others, with discussions in relation to contemporary art.

KAB TALKs "No.4 October 25, 2022 Wendelien van Oldenborgh", was held during "Whole Town Residency", and led to the special public programme, "KAB Book Club: Unraveling Participatory Art" as a part of the solo exhibition "Wendelien van Oldenborgh: unset on-set" at the Museum of Contemporary Art Tokyo. The museum's audience discussed in the context of socially engaged art over the artist's practices, focusing on contemporary art and the possibilities of dialogue in the community. Discussions among participants from Tokyo and other parts such as Kansai region who joined the KAB reading club based in Kyojima via online meetings were connected to the concerns of participants at the Museum of Contemporary Art Tokyo. Its club's discussions also provided an opportunity to expand the relationship and concerns between contemporary art and society through the perspective of Wendelien van Oldenborgh's work.

(F. Atsumi)

街まるごとレジデンス 会場マップ



01 「KAB Library and Residency [KAB]」

墨田区京島2-24-1

レナ・ヒリアルトボルツ Léna Hiriartborde 滞在スタジオ

-滞在スタジオ: 2022年9月17日~10月16日

-スタジオオープン: 10月1日、2日、8日、9日、10日、15日

02 「京島駅」すみだ向島エキスポ総合受付

墨田区京島3-50-12

-レナ・ヒリアルトボルツ 交流会: 10月14日 18:30~21:00

03 「京島共同凸工所」

墨田区京島3-64-10

-西原尚 Nao Nishihara 展示会場: 10月1日~10月31日

04 「京島共同木工所」

墨田区京島3-50-9

-西原尚 展示会場: 10月1日~10月31日

05 「ウラダナトナリ」

墨田区京島3-57-8

-ビヨルン・ベングツソン Björn Bengtsson 展示会場

10月1日~10月31日

-KABラジオ収録 (嘉藤笑子・西原尚・ビヨルン・ベングツソン)

06 「旧邸稽古場」

墨田区八広2-45-9

-レナ・ヒリアルトボルツ ワークショップ: 9月23日・24日

-ビヨルン・ベングツソン 滞在スタジオ: 9月23日~10月26日

-ビヨルン・ベングツソン 交流会: 10月24日 18:30~21:00

07 「キラキラ橋商店街~京島南公園 (マンモス公園)」

墨田区京島3-44-43-10

-西原尚 パフォーマンス: 10月22日

集合時間: 16:00

09 「CHAYA屋上」

墨田区京島3-22-11

-レナ・ヒリアルトボルツのパフォーマンス最終拠点

08 「協和井戸端広場」

墨田区京島2丁目26-1

-レナ・ヒリアルトボルツのパフォーマンス出発地点

集合時間: 16:53

10 「バーバーアラキ」

墨田区京島3-20-5

-橋本美和子 展示会場+プレゼンテーション

「魔女のオークション&闇市」: 12:00~20:00

11 「松尾孝之 展示会場」

墨田区京島京島3-57-8

-KABラジオ収録

12 「ウラダナ」

墨田区京島3-57-8

-ウェンデルリン・ファン・オルデンボルフ 展示会場

-KABラジオ収録

国際文化交流事業『街まるごとレジデンス』

期間：2022年9月17日～2023年6月30日

アーティスト：レナ・ヒリアルトボルツ、ビョルン・ベングツソン、西原尚、橋本美和子

主催：KAB Library and Residency [KAB]

企画・運営：嘉藤笑子 (KAB Library and Residency ディレクター)

協力：クレオ・ヴェストレベン

提携：すみだ向島EXPO実行委員会

助成：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

海外協力組織：D.D.A. Contemporary Art (フランス・マルセイユ)

発行：KAB Library and Residency

ディレクター 嘉藤笑子

編集：F.アツミ、嘉藤笑子

デザイナー：高野睦子 (中ページ)

長尾訓寿 (カバー・地図)

事務局住所：〒131-0046 東京都墨田区京島2-24-1

E mail: KABlibresidency@gmail.com

<https://kab-air.com/>

KAB Library and Residency Report 2022-2023

International Cultural Exchange Project "Whole Town Residency"

Artists: Léna Hiriartborde, Björn Bengtsson, Nao Nishihara, Miwako Hashimoto

Curator: Emiko Kato

Assistant: Cléo Verstrepen

Producer: KAB Library and Residency

Supported by Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)

Partner: Sumida EXPO Committee

Association: D.D.A. Contemporary Arts, Marseille, FRANCE

Published by KAB Library and Residency

Director: Emiko Kato

Editorial Staff: F.Atsumi, Emiko Kato

Designer: Mutsuko Takano (Page Design)

Norihisa Nagao (Cover and Map Design)

Address: 2-24-1 Kyojima Sumida Tokyo, JAPAN

E mail: KABlibresidency@gmail.com

<https://kab-air.com/>

Kab Kyojima Art
book Library
& Residency

ARTS COUNCIL TOKYO



助成：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

Supported by Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)

街まるごと “Whole Town Residency” レジデンシー

KAB Library and Residency Report 2022-2023